

日本・東南アジア海域における 9～10世紀の貿易とイスラム陶器

Trade and Islamic Ceramics in Japan and Southeast Asia
in the Ninth and the Tenth Centuries

山本信夫

①イスラム陶器

②粗製中国陶磁

③結語

おわりに

【論文要旨】

9～10世紀の東・西アジア海上交易を追究するにあたって、貿易陶磁は販路、商圏の推定に有効な資料となる。これまでの研究により、精製陶磁というべき格付けを持つ長沙窯陶磁、越州窯青磁、定・邢窯白磁の一群は中国の主力貿易品として広くアジアに出土し、東西アジアの交易を追究するための基準資料である事は証明された。これら中国から西アジア（アフリカ東端）までの遠距離航路の他に、東アジア、東南アジア、南アジア向けといった中距離航路や二つ以上の地域に及ぶ回航路などが存在する可能性は高く、それらの地域別航路の追究にあたっては、上記の基準資料のみでは限界も生じているところである。

ここで筆者は初期イスラム陶器と粗製中国陶磁（広東産陶磁、越州窯系青磁Ⅱ類、白磁B類）に注目した。初期イスラム陶器は東南アジア以東において出土例が少なく、またこれが西から東への遠距離貿易品であるため、航路の推定には単純な回答しか用意できない。しかし近年日本にまで出土が確認され6遺跡を数える点で、少数とはいえ伝来した意味について掘り下げておく必要があるだろう。その点日本における出土資料は考古的調査の精度からすると、これらの問題点に一步迫る事が可能であり、有用な視点を得る事ができる。ところで具体的な搬入のルート推定に有効な手がかりを得るには、初期イスラム陶器では難しく、また長沙、越州、定・邢窯の3種の主力中国陶磁からでもなく、同じ時代につくられた粗製中国陶磁の内容分析ではじめて可能となる。結論からいえば日本への貿易船は（9～10世紀に限ると）広東産陶磁を積んでおらず、少なくとも福建省以東を出港地としたと考えられる。このように航路推定の明確な手がかりは、長沙、越州、定・邢窯の主力（遠距離用）中国陶磁ではなく、粗製中国陶磁の分布傾斜に色濃く表れていると見る事ができ、航路解明には上位に位置づけされるものとなる。